

イギリス労働史研究の新地平

～Clive Behagg, *Politics and Production in the Early*

Nineteenth Century (1990) によせて～

長谷川貴彦

イギリス労働史研究における社会史的傾向が指摘されて久しい。だが、近年はその行きすぎに対する「労働過程抜き労働史」、「政治抜きの社会史」という批判を受けるようになってきた。こうした傾向に倅差すようにあらわれた本書は、そのスケールの大きさと理論的パースペクティヴという点において此迄の研究の地平を大きく越えるものになっている。ポレミカルな基調を持つ本書において批判の俎上に乗せられているのは、いわゆるブリッグス・シェーマである。それは、バーミンガムのような小生産が支配的な都市においては労使関係において温情主義的な関係が濃厚であり、バーミンガム政治同盟にみられるようなミドルクラスと民衆との結合を可能にし議会改革運動において成功を収めることができたのだというような労使関係の特質から都市類型を決定するアプローチで、その後のイギリス都市史研究にも大きな影響を与えてきたのであった⁽¹⁾。ベハッグはこれに対して重厚な実証と緻密な論理でバーミンガム像の再構成を試みているのである。以下、敷衍しよう。

* * * *

バーミンガム。現在この都市を論じることの意味はブリッグスに対する挑戦という意味だけではない。ベハッグが考察の中心に置いているのはワークショップの世界である。ワークショップとは大規模な工場とは区別される小規模な生産の場という意味である。ラファエル・サミュエルが指摘するように、このワークショップ的な生産の形態がイギリスでは一九世紀後半に至っても支配的なのであった⁽²⁾。またこれと関連して社会運動における主役もワークショップに基礎を置く熟練職人であったことはE・P・トムソンらによって指摘されてきた⁽³⁾。このように産業革命が工場制度を生み出し、そこにおける階級意識をもった工場労働者が社会運動・労働運動の担い手であったという伝統的イメージに対するオルターナティヴを提示することになるのである。

しかし、ベハッグは連続性のみでなくこうしたワークショップをとりまく文脈の変化という点に重きを置いているように見受けられる。まず最初に、産業化のなかでのワークショップ生産の役割の変化を明らかにする。当時の遺産目録から明らかにしたところによれば、バーミンガムの製造業者には明らかに二つの階層—大規模な経営者と小規模なそれ—が存在するという。短期的な信用の依拠するワークショップは、売り急ぐために足元を見透かした商人に安く買い叩かれてわずかな利益しか挙げることができない。これらは大規模経営の下請け化することによって生き延びようとする。ここでは単なる大規模経営にとっての不況期における「安全弁」的な役割しか果たしていない。ワークショップ生産の存続も

このような文脈の中で語られることになる。

次にワークショップ内部に目を移す。そこで民衆は、伝統的な聖月曜日の伝統にみられるような労働規律に身を置き、労働組合は形式的なものではなく全員参加、そこからの逸脱者には暴力的制裁＝シャリヴァリが待っているという「野蛮な」世界なのだ。産業化の圧力はこうした労働の世界へも浸透し、小生産者は下請け化しつつ生存競争にちかちか迫っていくために機械化、労働の集約などの再編成を行い労働の世界の自律性を解体しようと試みる。他方、小生産者のなかには、オーウェン型の協同組合を形成し生産者と消費者を直接結んで独自の市場を確保することで、大規模経営に対抗し伝統的な労働の世界を保持していこうとするタイプも存在した。

こうしてワークショップは、小生産者の動向をめぐって二つの文化の対立の場と化す。経済的自由主義を基調とするミドルクラスの文化は、その「開かれた社会」への上昇幻想をふりまくことで彼らを取り込もうとする。しかし、彼らの存在は不況期の「安全弁」として、労働の世界の自律性を解体するためのエージェントとして重要視されるにすぎない。他方、民衆からは独立で自由な小生産者の世界を守ることへの期待がこめられる。この様に、階級間の温情主義を強調することは、現実存在する利害対立をおおい隠すためのレトリックであったことが豊富な史料に基づく実証から明らかにされる。そして、この闘いは産業化のプロセスで前者が後者を制圧するという形で決着がつくのである。

だがベハッグは、対立の側面だけでなく二つの文化世界の交わる境界面にミドルクラスと民衆との共通の言語が形成されたことにも注意を向ける。そして共通の言語はワークショップ内の問題にとどまらず、政治的なイデオロギをめぐっても形成され、これが共通の敵としてのトーリー＝アリストクラシー連合に向けられるとき、パーミンガム政治同盟に見られる民衆とミドルクラスの結合を可能にする。議会改革からチャーティズムにいたるダイナミズムはこうした文脈から語られ、一八三九年のブルリング暴動は経済的な不況が原因ではなく、政治的・文化的な対立を背後にもっていたという点が述べられる。

ここで示されている構図は明快である。独自の価値観をもつ二つの世界－エリート文化と民衆文化－が存在し、産業革命という歴史的なコンテクストのなかで両者のせめぎあいと相互浸透が生じる。そして、国家と民衆とを結ぶさまざまな支配・統合の力関係に規定され、この二つの文化世界の交ざり合う境界面に小生産者が位置したとするのである。またそこで形成された言語もそれぞれの側から異なる意味が込められていたことが言語理論の方法で分析される。民衆もミドルクラスもそれぞれの価値体系の中でしかその言語を理解しない。しかし、その言語の流通する領域が、歴史的な状況の中で存在したという特殊性が強調されているのだ。

* * * *

本書の意義は次の様にまとめる事ができよう。

第一に、労働過程と政治との間を埋めるために経済史、民衆文化史、あるいは言語理論

といった様々な方法を戦略的に取り入れブリッグス以来の反映論的認識を乗り越え、経済－社会－政治の諸側面の関係を重層的に構成し、かつそれらが不可分のものとして関係していることを説いてみせたのである。

第二に、社会集団ないし社会運動の性格規定をめぐってひとつのアプローチを提示している点である。E・P・トムソンは、イギリスにおける労働者階級の成立にとって文化のもつ意味を強調した。この点は近年、L・ハントの「政治文化が階級を創る」という観点の中で発展させられている。バーミンガム政治同盟もミドルクラスと民衆との間での共通の言語＝政治的イデオロギイをもつところに成立したものである。ペハッグは、しかし、そこにおける二つの階級利害の相互浸透という契機を見逃してはいない。いわば力関係の産物なのだ。文化の個別利害を越えた統合作用だけではなく経済的なモメントも無視することができないという多元的なアプローチは、今後の社会運動史研究の展望を開くものではなかろうか。

このように本書は政治文化論として、また都市論としてさまざまな読み方を可能にする書であろう。事実、重厚な内容はそうした広範な読者の問題関心に応えてくれるものである。ただ一点だけ指摘させてもらえば、近年の都市史研究において重要な位置をしめているミドルクラスの問題があまり論じられていないのは気になる。例えばミドルクラス的な生活様式の浸透が民衆の中で女性の位置をどう変えたかという問題は、二つの文化をフェミニズムの観点から対比するうえでも無視することができない論点ではないだろうか。

いずれにせよ現在のイギリス史研究におけるひとつの到達点を示す本書は、労働史という枠を越えて読み継がれていくことだろう。

(注)

- (1) Briggs, A., *The Background of the Parliamentary Reform Movement in Three English Cities*, *Cambridge Historical Journal*, IX, 1948.
- (2) Samuel, R., *Workshop of the World: Steam Power and Hand Technology in Mid-Victorian Britain*, *History Workshop Journal*, 3, 1977.
- (3) Thompson, E. P., *The Making of the English Working Class*, London, 1963.

(はせがわ たかひこ・東京大学大学院・イギリス近代史)